

井伏鱒二とその郷土

岩崎文人

○井伏の生家とその描写

私たちは食事すませると旅館を出た。福山から加茂村といふところに行く路順は、府中行の両備便鉄道で万能倉といふ駅に降り、そこから自動車で行くのが便利だと旅館の番頭はさう言つて説明した。(中略)私たちは番頭に教はつた通り万能倉駅で下車したが自動車屋らしいものは見つからなかつた。人力車に乗つた。駅の前には田圃を背景にして道の両側に農家とも商家とも区別のつきかねる家がならんでゐた。この駅から加茂村大字粟根まで二里弱の道程であるといふ。(中略)路は最後に急な坂みちになつて、その坂をのぼると路ばたに辻堂と大きな石地蔵の建つてゐるところで俵夫は梶棒を卸した。(中略)そこから枝みちになつてゐる坂をのぼつて行つた。私は俵夫に待つてゐるやうにいひふくめ、コマツさんといつしよに若い衆の後について行つた。坂の突きあたりには高い石崖があつた。石崖の上の土塀から、柿の木と白壁の倉がのぞいてゐた。(この辺の家はみんな石崖を前にめぐらしてゐる。)石崖に沿うて坂をのぼつて行くと、路は折れ曲つて土塀と倉の間を行くようになつてゐる。そして倉と対面に建つてゐる離れの廊下には、大きな机を持ち出して紋つき姿の中年の男が坐つて墨をすつてゐた。

『集金旅行』(昭・12・4)は、妙な経緯から「私」が望岳荘というアパートの住人の一人であるコマツさんと一緒に、部屋代未納者から未収金をとりたてるためと彼女の古い恋人から慰籍料をまきあげるために、各地を巡つて歩くといふ言つてみれば旅行記の形をとつた小説であり、右の文章はその『集金旅行』の終末部分、「福山市から五里北方の深安郡加茂村大字粟根といふところにある」「四箇月分の部屋代を踏み倒してこの田舎に逃げ帰つた」文学青年鶴屋幽蔵(この名前は「おらんだ伝法金水」を書いた時の井伏鱒二の筆名であるが、言うまでもなく作者自身の戯画化である。)を訪ねていくくだりである。

井伏鱒二の出身地は、広島県深安郡加茂村粟根八九番地(現在は加茂村・山野村・広瀬村・加法村・内下加茂とが合併し加茂町)である。加茂町は深安郡の最北端に位置し、東北側は岡山県芳井町および井原市に、東南側は神辺町、南端は福山市、北西部は神石郡三和町、西南部は芦品郡駅家町にそれぞれ接し、(『備後加茂』中国観光地誌社 昭・45・7)東西約一〇K、南北約二七K、人口二万弱のもの静かな落ち着いた町で、町名の加茂は京都賀茂神社に由来する。

井伏の生家は、加茂町の南部に位置し、山陽本線福山駅から北方約一四K、福塩線万能倉駅から北方約六Kのところであり、右の引用文において鶴屋幽蔵邸に託して語られてゐる通り、山野へ向けて走つてゐる県道を左に逸れ、さらに辻堂と大きな石地蔵の建つてゐる路傍を折れて坂道を上つた山の中腹に、高い石崖を築き、ぐるりに土塀を配し、その中にどしりとした白壁の倉、長い落縁のある母屋を持つ、いかにも旧家然とした豪家である。そして引用文にもある通り、大きな柿の木がひときわ高く聳えてゐる。

井伏文学の特質の一つとして、空想力の豊かさや誇張がよくとりあげられるが、基本的には、井伏鱒二は事物を的確に、しかも意識的にとらえる型の作家であると言えよう。

井伏鱒二ほど愛着を持つて郷土を描いた作家は稀であらう。小説の舞台がえてして牧歌的な山村であつたり、都会が舞台であつてもどこかに田舎臭があるのは、井伏の故郷である中国地方の風土への郷愁のなせる業である。随筆の中で郷土が懐かしく語られてゐるばかりでなく、小説の中でも井伏の郷里に実在する地や人物がそのまゝの名称で使用されてゐたりもする。井伏は、「実在の人物を小説で取扱ふといふ際に、本名をそのまま用ひることは必ずしも卑怯ではないと思ふ。ことに亡くなつた人物を偲び供養する意味で叙述する場合には、本名を用ひなくてはどことなくその人の特徴が消えてなくなりさうで惜しくて仕様がなない。」(『喪章のついである心懐』昭・9・2)と記しているが、ここには実在する人

物を作品化する場合は井伏の姿勢がうかがえると同時に、井伏の描く人物が常に庶民的な暖かさを有している要因がわかる。今ここで、井伏の郷土が何らかの形で描かれている作品を便宜的に列挙してみただけでも、「歪なる凶案」(昭・2・2)、「谷間」(昭・4・1~4)、「朽助のゐる谷間」(昭・4・3)、「丹下氏邸」(昭・6・2)、「川」(昭・6・9)、『集金旅行』(前出)、「経筒」(昭・21・4)、「追刺の話」(昭・21・9)、「当村大字霞ヶ森」(昭・21・11)、「復員者の噂」(昭・23・6)、「白毛」(昭・23・9)、「遥拝隊長」(昭・25・2)、「丑寅爺さん」(昭・25・5)等、枚挙にいとまがない。

『川と谷間』(昭・14・10)の序で、井伏は収録された作品をさして「これは私の土俗趣味に発し私の空想による田園を現はした一種の風物誌である。」と解説しているが、右に示した作品群は、井伏の郷土を有効に生かしたまきしく「田園風物誌」たるにふさわしい抒情を漂わせている。例えば、「谷間」における姫谷村(井伏の生家がある粟根北西約五Kの部落)、中条村(粟根の東隣村)、なまがり(四川から百谷部落に抜ける村道)、「白毛」における四川(粟根の西隣部落)、「遥拝隊長」におけるハッタピラ池(粟根と広瀬部落との境)等はいずれも実在し、また、「川」における自然、いわゆる八当村大字霞ヶ森物語とも言うべき系列に属する「追刺の話」「当村大字霞ヶ森」「復員者の噂」「丑寅爺さん」における風土等は、井伏の郷土が空想の原点になっている。また、人物造型においても、厳密な意味ではモデルと言えないにしても(何故なら井伏はそれらを著るしい捨象と戯画によって描くゆえに)、かなりの数の郷土の人物が登場してくる。「朽助のゐる谷間」における朽助―この作品の原型である「歪なる凶案」においては伊作(井伏の子守をした伊十)、「丹下氏邸」「谷間における丹下亮太郎(加茂町の旧家丹下家二十八代目亮一)、「川」における俣夫(吉岡伊太郎)、丹下(前出)、瀬良(世良)、「経筒」における世羅(前出)、「復員者の噂」における水車屋の宙さん、鍵屋の虎造(人物についてははっきりしないが、両屋号とも加茂町にある)、「遥拝隊長」における橋本屋の優さん、新宅の松の字(実際には屋号が入れ替わっており、実在するのは新宅の優さんであり橋本屋の松の字である。)等は皆現加茂町に実在した人々であり、実名のまま、あるいはそれをもじった形で登場しているのである。

しかしただここで注意すべき点は、こういった場所にしろ人物にしろすべて作品の中にストリートには出てこず、井伏は二独自の豊かな作家資質(つまり大胆な切り捨てや極端とも言うべき誇張)によって肉付けされた、言わば井伏プリズムとも言うべき媒体を通して郷土色豊かな地として、あるいは庶民として出てくるということである。

ここで、これらの地名あるいは人物を全て綿密に考証する余裕はないが、「谷間」「朽助のゐる谷間」「丹下氏邸」等の作品をとりあげ、井伏は二と郷土のありようをより鮮明にしてみたい。

〇「朽助のゐる谷間」について

「朽助のゐる谷間」は昭和四年三月、『創作月刊』に発表されたものである。この作の主人公である谷本朽助に関して、井伏自身「悪戯」(昭・6・7)の中で「(前略)私は『朽助のゐる谷間』といふ短編を書いたが、『朽助』は『朽木三助』から思いついた名前であつた。」と記しているように、この名前は井伏が福山中学に在学中友人に頼まれて、当時大阪毎日新聞に「伊沢蘭軒」を連載中の森鷗外に反駁文を書いた際に使用したものである。朽助の名称はかくして生まれたものであるが、この作品の原型は早く「歪なる凶案」にある。「歪なる凶案」について、井伏は「子供のときの私と伊十とのことをモデルにして、幸福の定量を代数の方程式で計算した短編である」(『鶏肋集』)と解説しているが、伊十というのは井伏の子守をした人で『鶏肋集』においてもかなり書き込まれている人物である。伊十は加茂村大字粟根深山口の人で、角力取りあがりの兄丈左衛門、嫁に行ったがうまくいかず実家に帰つた姉のオキチの三人兄弟で、不幸にもオキチは木阪の池という溜池に身を投げて死に、伊十もまたその後を追うように同じ池で死亡、ために丈左衛門は発狂し、最後には縊死をとげるといふ不自然な死にみまわれた兄弟である。「歪なる凶案」では、伊十が伊作として、オキチは実名のみ、丈左衛門は朽一郎として登場し、ほど忠実にその悲劇が再現されている。

ところで「朽助のゐる谷間」では「歪なる凶案」におけるような陰惨さ(尤も井伏文学の多くがそうであるように、題材によって想起されるほど暗くはないが)は失なわれ、虚構性の極めて強い作品になっている。幼児の日の井伏が乳母

車に乗って子守に押させる場面はほとんどそのまゝ使われているが、以後に展開するものは全く異質のものである。「朽助のゐる谷間」は、東京に住んで不遇な文学青年の暮しをしている「私」（例の井伏の慣用手段としての私）が二十年前自分の子守をしてくれた朽助のところに転がり込んだ混血娘タエトの懇願により故郷に帰り、貯水池の築堤に反対する朽助を説得するという筋の小説である。この小説に描かれている貯水池については、関係村・広瀬村・加茂村・下加茂村・上岩成村四村にまたがる大築堤工事によって完成された大谷池が井伏の創作に大きな影響を与えていると思われる。タエトの手紙には「一昨年以來、毎日毎日池の工事が続いてまゐりまして、今日では漸く堤防も出来上りました。大きな堤防であります。川と川との間の谷をせきとめたのでございます。水がたまると周囲二里半の池になる由であります。」と書かれているが、大谷池は、大正一三年八月第一回大谷池築堤協議会発足により始まり、大正一五年四月工事に着手し、四年継続事業で昭和四年三月に完成されたもので、広瀬村大字百谷字大谷の鵜谷を堰ききって築造され、敷地は左右の山岳が狭まり、岩磐が露出されて急傾斜をなす築堤上最適な地に設けられ、貯水量一四八二七八立方坪高さ一〇〇尺満水面積八町三反余周囲約一里弱に及ぶものである。

月明りの夜、深い谷底を歩くことは、これは楽しいものである。路は、工事に必要からであらうが、新しく運んだ土で幅広くされ、土の上には荷車の轍が深く刻まれてゐた。（中略）しかし私の楽しい行程は意外に短かかった。谷を挟んでゐる山から山にまたがつて、巨大な城壁に似た石崖が築造されてゐたからである。池の堤防なのである。

私は堤防の基礎から私の立ちどまつた場所までの距離を目算して、堤防の頂上を上目でならんだ私の視線の角度を意識に入れ、この石崖の高さは三百尺余であることを知つた。この堤防の支へるであらう池の水底に、朽助の家が沈むのである。（下略）

右の描写は、池底に沈むべき運命にさらされる朽助の家を「私」が防ねて行く場面である。中央公論社『日本の文学・井伏鱒二』（昭・41・10）の年譜によれば、井伏は大正十四年、昭和二年と帰省しており（井伏鱒二の甥にあたられ現在井伏家を継いでおられる井伏章典氏は、年譜に載っているものは長期滞在したものであつて、それ以外数度帰省していると語っておられる。）、また、この築堤

工事がかなり大がかりな（池底に没した耕地面積は五二八町に及び、地元の人のお話では百姓家一軒が沈んだという。）であり、着工まで幾度も参集協議されており、井伏もそれに関心をもち、こうしたことがらに触発されて「朽助のゐる谷間」は成立したのであろう。なお、本文中朽助の語る養鯉の話は、井伏の夢がこめられているという。井伏章典氏は、大谷池完成後も大谷池は水量も豊富であり水温も低いので、鱒でも放池すればよいと井伏鱒二が常に語っていたと話しておられる。また、朽助が回想する山鳥や雉子をとつた話は、後年井伏が「鳥の巢」（昭・25・2）という作品において懐しく回想しているものと類似のものである。

○「谷間」と「丹下氏邸」について

「谷間」（昭・4・1）4『文芸都市』に連載）も「丹下氏邸」（昭・6・2『改造』に発表）も共に井伏の郷土にある旧家・丹下家をとりあげたものである。

丹下家は、地方によく知られた旧家で、井伏の生家から約三K西方の同町北山七八番地にあり、その祖は室町時代官氏の家臣で毛利勢と戦い功があり、現在は二代目丹下才助郎氏七三才が継いでおられる。氏の養父丹下亮一は広瀬村（現加茂町）の村長を大正一二年から昭和六年まで、また郡会議員までも歴任した名士である。井伏は、「丹下氏邸」について「人物も、事件もみなフィクション。丹下氏は、生家の隣村にある名家の姓と同じで、現在も続いているが、この小説の主人公とは全く関係ない。小説の丹下老人の性格は、知っているある老人の性格の人を頭において誇張して書いたもの」（伴俊彦聞き書、筑摩書房版全集月報4）と述べてはいるが、ともあれこの家が井伏の空想をさそいだしているのである。

両作における語り手の「私」は、「谷間」では、「姫谷焼の寵跡を発掘する目的で東京を出発し」「うまく茶壺や大皿を掘り出して、ひとつ大いにまうけてやうといふ魂胆」を持つ人物として、また丹下氏邸においては、「姫谷焼といふ陶器の寵跡を発掘する目的でこの田舎へやつて来た」人物として、設定されているが、言うまでもなくこれは作者の戯画化である。ここで記されている姫谷焼といふのは「江戸時代初期、加茂町宇姫谷で焼かれていたもので、作品はきわめて

精巧」「色絵や染付けの紋様は（中略）簡素なものを描いたものが多く」「市右門という人が姫谷で焼いたので「姫谷焼」の称があり」「備後加茂」前出、その窯跡は東西三〇m南北五mの登り窯で、昭一二年広島県史跡に指定されている。

「谷間」は、井伏鱒二が尋常二・三年の頃祖父民左衛門に連れられ、その窯跡を廻りに行った際の見聞がもとになっているのであるが（「半生記」）、「私」がたまたま丹下氏邸に寄寓したために、彰徳碑樹立のための姫谷村と中条村との寄付金騒動にまきこまれるという筋の小説である。丹下氏邸は先に述べたように加茂町大字北山字四川にあるが、作品の上では姫谷村となっている。これは姫谷焼の窯跡の地所所有者が姫谷に近い地に在住した渡辺彦一（丹下亮一の実父で、丹下家と同様地方の旧家）であったためであろう。騒動の持ちあがる姫谷は、井伏の生家から北西約五Kにあり、百谷を通り作品に出てくるなまがりを抜けると丹下氏邸の横に通じており、そこから約三K東南に中条村がある。この部分の描写は隣村に通ずる路といふのは、急斜面の山腹をよち登るところの迂回した路なのである。丹下氏の描いた図面を参照すれば、この急斜面一帯の名称を「なまがり」といふ。（中略）谷間の方を眺めると、丹下氏の家は繁茂した柿の木の葉によって覆はれ、葉は申すまでもなく緑色で、太い幹は黒色に見えた。離れの一部だけが緑色の葉の下からはみ出して窓の障子一枚が白く長方形に光っていた。

と描かれている。このように「谷間」においては、井伏の郷土がそのまゝ、実名そのまま使用されているが、「私」が寄寓する丹下家の主人である丹下亮太郎は、先に述べた丹下亮一の輪郭に井伏が性格付けしたものである。例えば「谷間」においても、「丹下氏邸」においても、丹下亮太郎は「姫谷村四川村芋原村三箇村連合村役場収入役」となっているが、丹下亮一は広瀬村（北山村）四川他十字より成るVと百谷村（姫谷他十字より成るVの合併村）の村長であった。作品では「備後国深安郡姫谷村大字泡音九十八番地に生る」となっているが、実際は深安郡広瀬村字北山であり、渡辺彦一三男である。（亮太郎の「長女花枝は嫁じて芋原村渡辺氏に在り」とあるのはこのためか。）泡音は言うまでもなく井伏の生地粟根をもじったものである。また、「谷間」における丹下亮太郎の名刺の裏面にある彼の来歴については大部分が井伏の創作であり、その息子吉太郎（井伏章典氏は井伏家より分家した人が吉二郎というのでそれからきているのではないかと

言っておられる。）は全くの創作である。

さて「丹下氏邸」であるが、この作品は次のような場面によって始まる。

丹下氏は男衆を折檻した。（丹下氏は六十七歳で、男衆は五十七歳である。）この老いばれの男衆はいつも昼寝ばかりして、丹下氏のいふところによると、ひとつ性根を入れかえてやらなければいけないといふのであつた。私は丹下氏がそんなに怒つたところをまだ一度も見ることがない。

私は風呂場のかげからのぞき見して、その折檻の成行きを見た。丹下氏は物置のなから三枚の箆をとり出して、それを柿の木の下に敷いた。

「丹下氏邸」の男衆谷下英亮はかくして丹下氏が出勤するまで箆の上に寝ころがされ、その上肌ぬぎにさせられて、左足の踵を柿の木の瘤に載せられ、責をすわされるといふ折檻を受けることになるのであるが、この丹下氏の造型は井伏の語つている通り創作で、丹下才司郎氏も、養父（亮一）は非常に凡帳面な、それでいて気の長い、はっきりとした意志表示を直ぐにはしない性格であり、「丹下氏邸」に出てくるタイプとしては、厳格な祖父（静一）に近いと話しておられる。谷下英亮も、また、このストーリーも井伏の創作である。丹下氏邸は幾棟もの建物から成り、まさに邸宅という名に似つかわしいが、男衆が折檻される場面に出てくる柿の木にあたる場所には大きな梨の木があり、恐らくそれが想定されているのであろう。

こうしてみると、井伏文学と郷土との関わりはかなり深い。井伏文学の特色は、社会の底辺に位置する名もなき庶民の笑いや悲哀の定着であると言ってもよいが、井伏の郷土はまさしくその原点に位置する。しかし、作品の中に形象された庶民は、単なる郷愁とか特定の風土とかが生み出したものという狭小さを越えて、普遍的な価値を獲得している。それは、先にみてきたように井伏の郷土や郷土の人物が作品の中に生の形で直截に描かれるのではなく、あくまでも井伏鱒二の豊かな空想力によって新しい生命を獲得して登場するからである。ここではその方法としての卓逸した比喩・大胆な捨象言うならば井伏の現実描写法について詳説する余裕はないが、いずれ一貫して郷土的なものを追い続ける井伏という視点から、稿を改めたい。

（付記）この稿を成すにあたって、丹下才司郎、井伏章典両氏には数多くの御教示をいただいた。ここに記し謝意を表したい。